

niponica

Discovering
Japan

no.

25

にほにか



特集

日本の漆工芸

niponica にぽにか^{no.} 25 contents

日本語で「日本」を表す時の音「にっぽん (nippon)」をもとに名づけられた「にぽにか (niponica)」は、現代日本の社会、文化を広く世界に紹介するカルチャー・マガジンです。日本語版の他に、英語、スペイン語、フランス語、中国語、ロシア語、アラビア語の全7カ国語版で刊行されています。

特集

日本の漆工芸



表紙 / 越前塗のお椀
写真 = 青島克巳

no.25 H-310318

発行／日本国外務省
〒100-8919 東京都千代田区霞が関 2-2-1
<https://www.mofa.go.jp/>

日本各地のさまざまな漆器。左上から時計回りに、正月に祝いの薬酒（屠蘇）を飲むための器（会津塗）、特別な日の料理を入れるための重箱（輪島塗）、お盆（山中塗）、5客のお椀（越前塗）。
写真 = 青島克巳

- 04 強さと繊細さが生み出す美
- 10 地域のさまざまな漆器
- 12 日本の手仕事
～漆器をうみだす職人たち～
- 16 受け継がれる日本のこころ
漆で直す人びと
- 18 伝統と革新 漆工芸の新しい形
- 20 くらしに漆塗りを取り入れる
- 22 召し上がれ、日本
雑煮
- 24 街歩きにっぽん
弘前
- 28 ニッポンみやげ
甲州印伝



特集

日本の漆工芸

日本の工芸品を代表する漆器。

世界から“japan”と呼ばれ、日本的魅力に溢れたその工芸品は、自然の恵みで日々の暮らしを包み込み、時を超えて語りかける。

強さと繊細さが 生み出す美

日本において、食器や家具などの日用品をはじめとして、祭具や武具、建造物、楽器にも多く用いられてきた漆。

その漆を用いた工芸品の数々は、どのような価値観や美意識から生まれ、育っていったのか。
人間国宝の室瀬先生にうかがいます。

談話：室瀬和美

日本における漆の文化

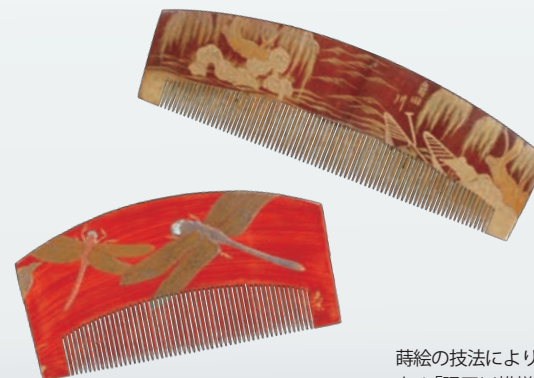
日本では、ウルシノキから採取された塗料として漆が用いられています。塗られるものは、日常品から祭具、道具や建造物に至るまで様々なものがあります。

日本人は漆の特性を活かした多くの品々を生み出しました。
様々な職人の手によってつくられた漆の文化は、表現も手法也多岐に渡り、私たちの目を楽しませてくれます。

読者の皆さまへ
「漆」…ウルシノキから採取された樹液を加工した天然樹脂塗料。接着剤としても利用される。ヨーロッパの黒塗りの家具や食器に用いられるラック虫の分泌物をアルコールで溶いて作られたラッカーとは異なり、塗り重ねることで透明感や深く濃い黒が出る。
「工芸」…工芸とは、機能性と美術的な美しさを融合する、日本の伝統的な手仕事を指す言葉。
「漆器」…漆を塗り重ねた工芸品。英語で一般に lacquerware と呼ばれているが、ラッカーを使用したものではない。



筆記具などを入れておく箱である硯箱。表面に蒔絵や螺鈿などの技法を用い豆の葉と実が描かれて、蓋裏には兔が描かれている。
「豆兎蒔絵螺鈿硯箱」26×18.4×14.7cm
19世紀（所蔵＝東京国立博物館 Image:TNM Image Archives）



蒔絵の技法によりトンボなどが描かれた櫛。
上 / 「隅田川模様蒔絵櫛」18×5.5cm
下 / 「露草蜻蛉模様蒔絵櫛」13.7×7.2cm
19世紀（所蔵＝東京国立博物館 Image:TNM Image Archives）

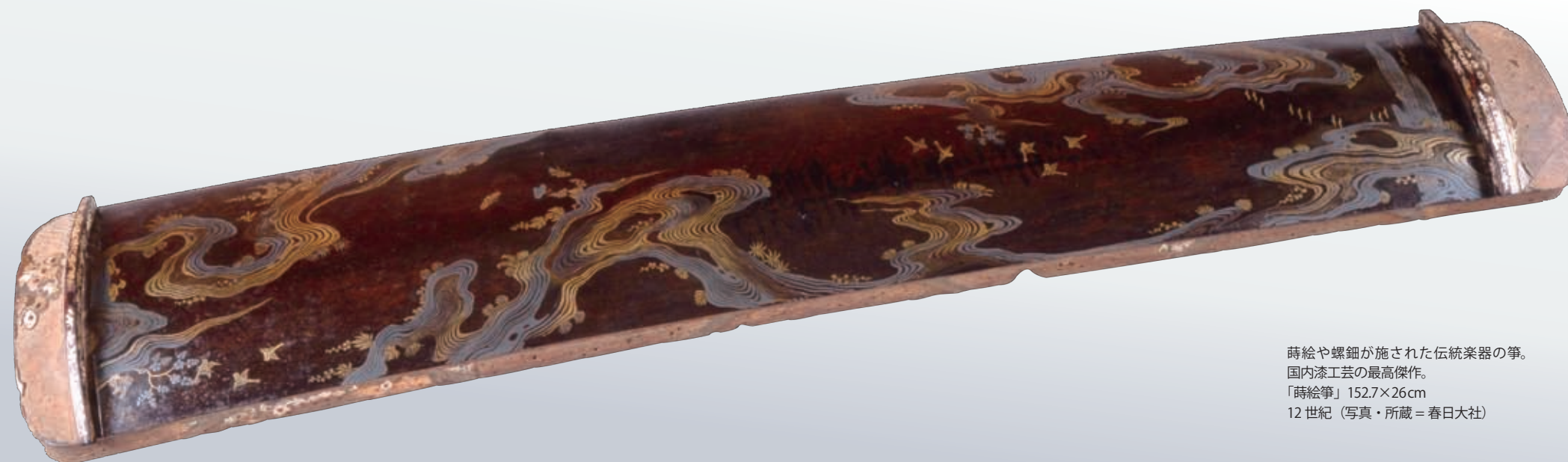


婚礼調度の定番であった将棋盤。蒔絵の技法により、有栖川宮家（17世紀前半～20世紀前半に存在した皇族の一家）の家紋である三ツ横菊紋が描かれている。
「黒漆塗世唐草蒔絵将棋盤」36.6×33.7×21.7cm
19世紀（写真・所蔵＝彦根城博物館）



勝負の際に盤上に並べて動かす「駒」と呼ばれるものをに入れておく駒箱。
19世紀（写真・所蔵＝彦根城博物館）

漆を用いた 工芸品の数々



蒔絵や螺鈿が施された伝統楽器の箏。
国内漆工芸の最高傑作。
「蒔絵箏」152.7×26cm
12世紀（写真・所蔵＝春日大社）

ひかりを感^{かん}じさ^{くろ}せる黒
あいはん^{ない}がざい^{うつく}のものが内^{うつく}在^{うつく}した美^{うつく}しさ

うるし漆はウルシノキから採取した漆液です。天然の塗料であり、接着剤でもある漆の日本における利用の歴史は長く、7000年以上にもなります。

たいこ^{つづ}から続^{うしぬ}く漆塗^{ぶん}りの文化は、当時既に高い美意識と芸術的感性などを持つものでした。その後、奈良時代（8世紀）に新たな局面を迎えます。日本の漆芸を代表する技法、蒔絵の誕生です。平安時代（8～12世紀）に入ると、当時の都であった京都を中心地として発展し、鎌倉時代（12～14世紀）には蒔絵の基本技法が確立します。室町時代（14～16世紀）以降にも数多くの名品が生まれ、江戸時代（17～19世紀）には技術的にもピークを迎えます。

16世紀後半には、来日したポルトガルやスペインの宣教師たちにより日本の蒔絵が母国にもたらされ、その漆器を見た現地の人々は、ヨーロッパの塗料にはないその神秘的な黒さと金の輝きに驚嘆。18世紀になると、“japan”と呼んで憧れを抱くようになったといいます。どこまでも深い黒であるにも関わらず、どこかに透明感を感じさせる——。一見矛盾するふたつの要素をあわせもつ漆は、ヨーロッパ中の人々を魅了しました。次第に代用塗料を用い、日本の漆器を模倣する動きも生まれ、それらは“japanning”と呼ばれるようになりました。



竹を細く裂いて編んだものに漆を塗ったかご「籃胎漆器」(写真・所蔵＝是川縄文館)



蒔絵の技法で当時流行の文様を描いた硯箱。平安時代の漆工芸を代表する名品「片輪車蒔絵螺鈿手箱」12世紀（所蔵＝東京国立博物館 Image:TNM Image Archives）



上 / 大型の手箱に化粧道具一式が収められた最古の遺品「梅蒔絵手箱」13世紀頃(写真・所蔵＝三嶋大社)
下 / 「梅蒔絵手箱」の中に収められた美しい化粧道具の数々

実は漆は、モンスーン気候地帯でしか採取できません。漆器は日本以外の東アジアから東南アジアの国々でも作られていますが、日本の漆器は比類ない美しさを誇ります。その秘密は、堅く固まり美しい艶をもつ日本産漆の特色と、日本人の繊細なもののづくりの姿勢にあります。季節ごとに微妙に性質の違う漆を丁寧に採取し、工程あるいは表現技法ごとに適した漆を使い分けていたのです。これら素材と技を活かすことによって十分な強度と美しさを備えた漆器が完成するのでした。

江戸時代まで順調に成熟した漆工芸ですが、その風向きが急激に変わったのは、明治時代（19～20世紀）のことです。幕藩体制の崩壊で工人はパトロンを失い、また開国により「美術」と「工芸」を分ける西洋的な価値観が流入しました。日本では、漆器をはじめとする「工芸」は「美術」そのものでありましたが、これを境に工芸品は「美術」の下位概念となってしまいました。



すべてを美しく、
日本を彩^{いろど}った漆器

上、右 / 中尊寺金色堂。奥州藤原氏の時代に花開いた平泉の黄金文化を今に伝える煌びやかな建造物。螺鈿細工などの当時の技術が集約された、日本の「国宝」第1号。(写真・所蔵＝関山中尊寺)



下 / 徳川三代将軍家光の長女である千代姫の婚礼調度。蒔絵の技法などが用いられた華やかな丁度の数々は計27点が現存している。「初音の調度（初音蒔絵調度）」17世紀頃(所蔵＝徳川美術館 © 徳川美術館イメージアーカイブ/DNPartcom)



しかし、漆工はその後も継承され続けました。幕府や天皇家の御用を手掛けていた漆工家の技は、東京においては日本初の官立の美術家養成機関である東京美術学校（現東京藝術大学）により守られ、磨かれ続け、今も最高峰の世界を私たちに伝えます。

一方、江戸時代に各藩の大名による産業奨励によって形成された各地の漆器の産地の職人たちも、価値観の変化と機械化の波に揉まれながらも生活を彩る品を作り続け、今も漆器のある暮らしを守っています。

日用品から最高級品までもが美しさを纏ったその文化は、その品々と精神とともに現在も生き続け、近年「工芸」は再評価されています。

各時代の日本人が精魂込めて作ってきた漆器は、壊れても漆で修復を行い、何世代にも渡って大切に使い続けられてきました。また、土中深くから発掘された数千年前の漆器でさえも、鮮やかな色と光沢を保っているのは驚くべきことです。

漆には、酸にもアルカリにも強いという性質があるため、大抵のものを腐らせてしまう日本の酸性土の中でも、漆器だけはしっかりと残り続けたというわけです。

これほどの強度をもちながら、漆器は紫外線にさらすことで劣化し、数百年サイクルで自然界の土へと還っていきます。マイクロプラスチックの問題が顕在化する今、漆器は、エコに取り組む上で、自然にやさしい素材として注目すべき存在でもあるのです。

日本の材料、日本人特有の精神によって引き継がれてきた漆文化。これは他国には真似のできない唯一無二のものであり、今後大切に守り伝える価値のあるものと言えるでしょう。

室瀬和美（むろせ かずみ）

1976年東京藝術大学大学院美術研究科漆芸専攻修了。国内外で作品を発表するとともに、漆芸文化財保存にも携わる。1991年目白漆芸文化財研究所を開設。2008年重要無形文化財「蒔絵」保持者（人間国宝）に認定される。同年、紫綬褒章受章。著書に『漆の文化』（角川選書）、『室瀬和美作品集』（新潮社図書編集室）。



代表的な装飾技法

長い歴史と数多くの産地に育まれたことで、漆器は技法のバリエーションがとても豊富です。しっかりと下塗りと上塗りを行った後に施される加飾によって、漆器は豊かな表情をわたしたちに見せてくれます。

右 / 硯箱の優品。絵画的な絵柄が蒔絵で表現されている。「柴垣蔦蒔絵硯箱」17世紀頃（所蔵＝東京国立博物館 Image:TNM Image Archives）
左下 / 馬の背に乘せる道具・鞍。黒漆を塗った表面に花型に切られた貝が煌めく優美な意匠。日本の鞍の代表的作品「萩螺鈿鞍」17世紀頃（所蔵＝東京国立博物館 Image:TNM Image Archives）
右下 / 沈金の技法で鳳凰などの文様が描かれた道具箱。日本における沈金の初期の作品。「鳳凰文沈金彫手筈」16世紀頃（写真・所蔵＝白山比咩神社）

蒔絵

漆器の表面に蒔絵筆と呼ばれる細い筆で漆で文様を描き、漆が乾く前にその上に金・銀などの金属粉を蒔いて文様を作り出す装飾技法。金銀模様が美しく浮かび上がる、日本の漆工芸の代表的技法。



拡大

葉の先端部分などは、金属粉を蒔いて、色づきはじめた葉の様子を表現している。

螺鈿

夜光貝などの貝殻の内側の真珠色に光る部分を薄い板状にすりおろして、模様にとって研磨し、漆器の表面にはめこんだり、貼りつけたりして装飾する技法。虹色に輝く絵柄が特徴で、蒔絵にも併用される。



拡大

沈金

漆を塗った面を刃物で彫って文様を施し、その溝に漆を刷り込んだ後、文様以外の部分をふき取って金箔を粉にしたものを押し込む装飾技法。彫った点や線に沿って金粉などが残るので、細くて繊細な模様が描ける。



拡大



地域の さまざまな漆器

京都から江戸、そして全国へと広がった漆器。
ここでは、日本各地でつくられている漆器の中から、
見た目や技法が特徴的なものをご紹介します。

ふくい 福井

越前漆器

非常に丈夫で実用面に優れた漆器。
素早くきれいに塗られた艶やかで
深い独特な光沢も特徴。
(写真提供 / 越前漆器協同組合)



おきなわ 沖縄

琉球漆器

主に艶のある朱漆や黒漆を用い、
漆を塗っただけで仕上げる「塗立」
と呼ばれる技法で知られる。南国
的な模様も特徴。
(写真提供 / 角萬漆器)



いしかわ 石川

木地の山中、塗りの輪島、蒔絵の金沢 と称される3つの漆器産地

1 輪島塗

下地を作る際に、消耗しやすい部
分に布を漆で貼り、さらにその上
に「輪島地の粉」(ガラス質の微化
石・鉱物)を混ぜた漆を塗ること
で堅牢な漆器になっている。
(写真提供 / わじま塗の津田)



2 金沢漆器

高度な「蒔絵」の技法による、豪
華できらびやかな美しさが特徴。
かつてこの地が加賀と呼ばれてい
たことから「加賀蒔絵」と呼ばれ
ている。
(写真提供 / 金沢漆器商工業協同組合)



3 山中漆器

下地の木目の美しさと、木地の表
面に凹凸の模様を施す「加飾挽き」
と呼ばれる技法が特徴。
(写真提供 / 山中漆器連合協同組合)



ぎふ 岐阜

飛騨春慶

木目の美しさを活かした素朴なが
らも透明感のある琥珀色が特徴。
(写真提供 / 戸沢漆器)



にいがた 新潟

新潟漆器

錆で竹の筋や節目などを精巧に表
現した「竹塗」という独特の技法
で知られる。
(写真提供 / 新潟漆器株式会社)



いわて 岩手

浄法寺塗

漆の産地でもあるため、漆本来の美
しさが際立つよう、あえて余分な装
飾を施さないのが特徴。
(写真提供 / 岩手県二戸市漆産業課)



ふくしま 福島

会津塗

日本で縁起が良いとされる「松竹梅」
の樹木や糸車と「破魔矢」と呼ばれ
る魔物を払う矢をあしらった「会津
絵」が有名。その他にも豊富な技法
を持つ。
(写真提供 / 福西惣兵衛商店)



きょうと 京都

京漆器

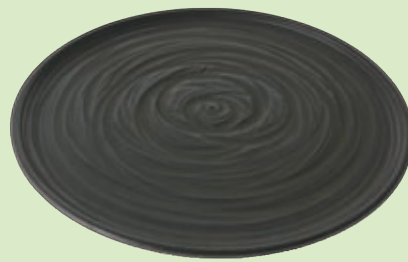
平安時代(8世紀頃)から連綿と
伝わり、茶の湯の文化とともに広
まった漆器らしく繊細さと内面的
な深い味わいを備えている。洗練
された優美なデザインが特徴。
(写真提供 / 京都漆器工芸協同組合)



かがわ 香川

香川漆器

彫刻刀で彫り込むことにより、独特
な陰影を生み出す線模様が特徴的な
「象谷塗り」と呼ばれる手法で有名。
(写真提供 / 一和堂工芸株式会社)



わかやま 和歌山

紀州漆器

下地の黒漆の上に朱漆を塗った後
で、あえて朱漆を研ぎ出し(炭な
どで表面の漆を研ぐ技法)、下地の
黒をわずかに見せる「根来塗り」と
呼ばれる技法で有名。
(写真提供 / 紀州漆器協同組合)





日本の手仕事

～漆器をうみだす職人たち～

写真：岩手県二戸市漆産業課、金井 元

分業によりつくられる漆器

漆器は、塗料となる漆をつくり、器の原型をつくり、それに漆を塗ることで完成する。そのほとんどが分業化された中でつくられており、多くの場合、一つの産地の中で各工程の専門の職人が連携して、一つの漆器を仕上げていく。

ここでは、各工程で名を知られる産地を通して、漆器をうみだす日本の手仕事を紹介したい。



上 / 漆が採れるウルシノキ。日本で使用される漆のうち、日本産はわずか 3% 足らずで、その生産量の約 70% を岩手県二戸市の浄法寺漆が占めている。
右 / 漆は空気に触れると硬化する性質があるので、漆掻き職人は傷をつけたら瞬時に漆を採取する。

【漆掻き】

細やかな仕事で、
いい漆をつくりだす。

日本産の漆の産地として知られている岩手県二戸市。ここは日本で一番漆掻き職人が多い地域でもある。漆器の塗料として用いられる漆は、漆掻き職人の手によって採取される。漆掻きは、漆の木に漆掻きカンナなどで横一文字の傷をつけ、傷を治そうと集まってきた樹液を掻き口からヘラを使ってかき集める仕事だ。職人は年間400本もの木を一人で見回りながら漆を集める。

漆掻きは6月～10月下旬まで行われるが、漆は採取時期によって乾き方や含有成分が異なるので、職人は季節ごとに微妙に性質の違う漆を分けながら採取している。例えば、6月～7月に採取する漆は水分が多く乾きが早いので艶上げ用の漆に向いている。ピークの時期は8月で、この月に採取した漆は夏の気候により水分が少なく、ウルシオール（漆の主成分）が最も多く含まれるため、最も品質が高い。天候や植生条件、そして木の回復状態をみて五日程間隔をおいて採取し、10月



には木に残った漆を掻き尽して終わる。

このように採取する漆だが、一本の木から1年で200gしか採取できない。職人はより多くの質の良い漆を採るために、木の状態を見極めて、傷をつける場所や間隔を決めているという。

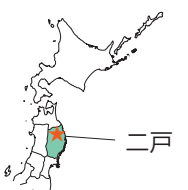
採取した漆は、攪拌して成分を均一にし、水分を蒸発させる工程を経て、精製漆となる。精製後は漆問屋へ納入され、漆を塗る職人の手に渡っていく。



右からカマ、ヘラ、カンナ、タカッポ（採取した漆を貯める樽）。漆掻き用の特殊な道具だが、これらの道具を作る職人は国内にも数人しかいない。

岩手県二戸市浄法寺

漆の産地。浄法寺の漆は、国宝や重要文化財などの修復に欠かせない。日光東照宮や金閣寺などの修復にも使われている。





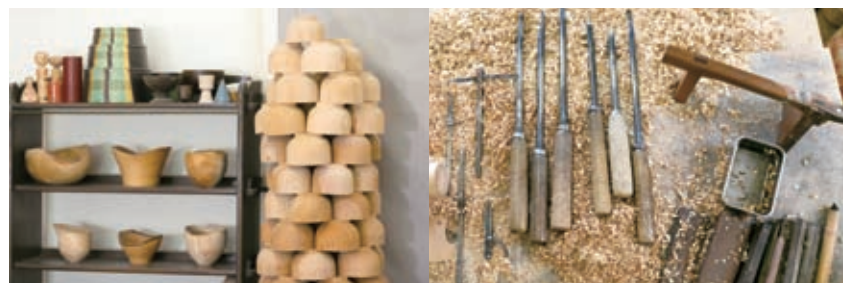
1. 荒挽き
2. 中挽き
3. 仕上げ
4. ブロックへ仕上がりまで。

【木地作り】

土台を疎かにしない心が、より強い漆器をつくりだす。

漆器の原型を木でつくる仕事が木地作りである。木地師と呼ばれる職人が、注文に応じた形に仕上げていく。木地作りには、数カ月～何年もかけて乾燥された「ブロック」と呼ばれる大まかに切られた木が用いられる。ブロックはろくろに固定し、まずは「荒挽き」（写真1）を行う。荒挽きの段階では、木に残っていた水分がさらに乾燥して器が小さくなることを見越して、仕上がり寸法より厚めに削り、削り終わったら一気に乾燥させ、水の含有量を減らすという作業を繰り返す。これは、木の動きを止めるための工程で、木は切られてからも生きて呼吸しているため、薄く加工された木地が空気中の水分を含んで歪んで変形するのを防ぐ意味がある。

左 / 木地はしっかりと乾燥させておく
右 / 道具は仕上がりを左右するため、全て木地師自身が手作りする



次に、仕上がりの形に近づけてカンナで削る「中挽き」（写真2）の作業を行う。一気に削るのではなく、木の乾燥を待って削るを繰り返す、時折、型板をあてて削り具合を確認する。形が整ったら、カンナを刀で持ち替え「仕上げ」（写真3）を行う。刀で繊細に削っていくことで表面があつという間に滑らかになる。木地師が生み出す木地は、大きさ、厚さに狂いがない。さらに、何度もしっかりと乾燥させた木地は強度がある。木地師は、後に塗る漆の艶や塗り上がりを決めるのがこの木地作りであることを良く知っている。

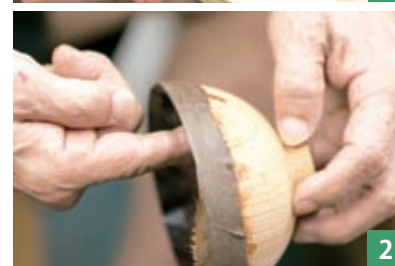


木地師
山田 真子

「木地の山中」として知られる山中漆器の唯一の女性木地師の伝統工芸士。近年は漆器業界で活躍する女性が増えている。



1. 壊れやすい部分に漆を塗る。写真は、接合部分や欠けやすい部分を漆で補強する「木地固め」を行っている様子。



2. 漆を染み込ませた布を貼り付ける。写真は、ふちなどの壊れやすい部分に布を貼り付け補強する「布着せ」を行っている様子。



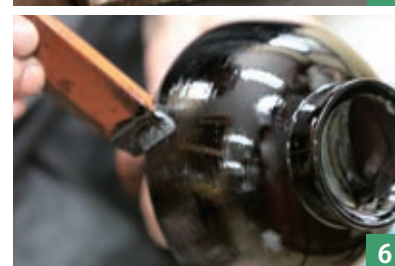
3. 市内の小峰山から採れる土からつくった「地の粉」を混ぜ合わせた下地漆を塗り込み、布の切れ目にある段差を平にしてい。



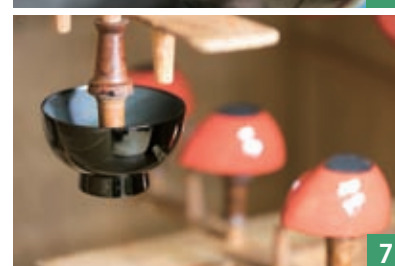
4. 下地漆を乾かして、砥石で研ぐ。砥石は下地漆にあわせて粗さを変えていく。粗め、細かめ、より細かめの三段階に分けた粉を塗り込んで研ぐ作業を3回繰り返す。



5. 塗りの作業に入る前に和紙で漆を包んで絞りを整える。



6. 漆の状態をみながら塗り上げていく。



7. 漆は水分を取り込みながら固まっていくので、湿度と温度を調整した室で乾燥させる。



8. 乾燥と塗りを繰り返し、最後に、チリとホコリを遮断した専用の部屋で仕上げの塗りをほどこして、漆器が完成する。



左 / 漆を塗る「漆刷毛」には脂気の抜けた人毛が使われている。
右 / 輪島塗には小峰山から採れる珪藻土を焼いて砕いて粉状にした「地の粉」を用いる。



【漆塗り】

漆を熟知しているからこそ、美しい艶が生まれる

漆器に施す漆塗りは、「塗師」と呼ばれる職人によって行われる。塗りの工程は産地によって異なり、輪島塗の場合は、塗りの工程だけで20工程ある。輪島塗はとても堅牢なことで知られているが、その秘密はさまざまな補強技術にあるという。接合部分や欠けやすい部分を補強することで強度を上げるのだ。最上質の漆をろ過し、数種類の刷毛で美しく仕上げられた漆器は、このまま商品になる場合もあれば、加飾が行われる場合もある。



塗師
津田 哲司 (わじま塗の津田)

輪島塗伝統工芸士。同じく、輪島塗の伝統工芸士である津田 眞一郎とともに親子で伝統の技を守り伝えている。

受け継がれる日本のこころ 漆で直す人びと

古くから修理して使われてきた漆器。漆による修復の仕事に従事するふたりの人物を紹介する。



右上 / 工房で修復中の高台寺蒔絵と漆塗膜の剥がれを直している様子。剥がれた部分にヘラで漆下地を付け、凹凸を平らにしている。

日用品修復でみえた 漆によってつながるもの

漆器は漆の被膜で保護されているので、手入れし、直すことで、世代を越えて使い続けることができる。

漆による修復をメインとした修復専門家として活動している河井菜摘さんもそんな漆の力に魅了された一人だ。河井さんがこの道に足を踏み入れたのは、ものを作る際などに多くのゴミが生まれてしまうという現実疑問を抱いたから。作り出すのではなく、修理をすることで息を吹き返す漆器は、実に修理し甲斐がある。

「長く大切にされるものだからこそ、何十年も先を見て修理しています。」と河井さんは言う。修理に訪れる依頼主の多くは30年～100年前、古くは150年以上前から受け継いできた品を持ってくることが多く、思い入れもひとしおだ。直し方は依頼主と相談しながら決めているので、単純に経年変化による独特の質感を残すこともある。使い続けられるように、受け継いでいけるように修復を行っていく。

「長年、修復に携わっていると、壊れ方の法則が見えてくるんです。壊れそうなところに対しては、ある程度先に手を打っています。」木も漆も呼吸しているので状態は常に異なるが、修復を通して見る目が養われ、技術が向上していく。漆修理は発見の連続で、苦労を感じた記憶がないのだという。安価な材料が使われているものなどは修理が大変なこともあるが、依頼主の喜ぶ姿にはやりがいを感じる。

「直すことでまた長く付き合える、という安心感セラピーのような働きをもっているようで、壊れることを含め、物事を前向きに捉えられるテクニックが身に付くみたいです。」

修復を通して、自分にもそれを手取る人にも変化が生まれる。その変化は、漆器を手にした次の世代にもつながっていく。



漆で修理している様子。状態に応じた最適な方法で直していく。



割れたところを漆で接着する「割れ直し」という方法で直された掛軸箱。接着後の仕上げに漆が塗られている。

河井 菜摘 (かわい なつみ)

修復専門家 / 漆作家

京都、東京、鳥取の三拠点で漆と金継ぎを主軸とした修復専門家として活動。日用品から古美術品まで 800 点以上の修復を行う。



文化財修復は、次世代への 文化と技術のバトン

文化財修復は日用品修復とは異なる。大きく異なる点は、「直すすぎない」「触りすぎない」ということだ。

「日用品修復は傷み具合に応じて塗り直しなどを行います。文化財修復は現状維持に徹し、傷みそのものも残すのです。」と文化財修復に従事して25年になる漆芸家の松本達弥氏は語る。傷みは時代の経過を表す証でもあるからだ。漆の劣化の度合いなどをみて、「今」必要と考えられる修復だけを行い、そうでない場合は、次世代の修復者に託す。

震災などの自然災害により激しく損傷した場合には、化学分析チームも加わって、より詳細なデータを元に修復にあたる。この際に一番に求められるのは、分野の異なる人たちと意思疎通ができること。

「修復には技術や知識はもちろん必要ですが、損傷部分からさまざまな情報を読み取り、それを記録し後世に伝えること、そして適切な修復を行うかの判断が重要です。」

作品がうまれた背景や文様が描かれた文脈を解明し、想像しながら、その時に最良な修復技術の選択を行う。そのため、優れた人材の育成には数十年の期間が必要となる。修復は現場での経験を積んで技術を習得することが多い。「漆を扱うには練度が求められるので、教育機関を整備したうえで人材の育成が急務です。文化をつないでいかなくては。」と、松本氏は熱く語る。現在、文化財修復は個々の施設や工房などで行われているため、年間で修復できる数は限られている。貴重な漆の文化を守るために、一つでも数を増やしたいという思いだ。

漆工芸品には過去の文化と技術が詰まっている。それを過去から現代、未来へとつないでいくために、今日も松本氏は文化財修復を行っている。



損傷の状態を細かく観察すると、素地構造がみえてくるという。文化財修復は、通常、漆で覆われている先人たちの高度な技術を見ることのできる、またとない機会といえる。

松本 達弥 (まつもと たつや)

漆芸家

日本工芸会正会員。漆芸文化財修復に従事。文化財レスキューにも取り組んでいる。



撮影：金井 元



伝統と革新

漆工芸の新しい形

従来の素地や商品、利用シーンを飛び越え、可能性を拡げつつある漆工芸の世界。最新技術や他分野との融合から生まれた形を紹介する。

1 漆 × 不燃材

コンクリートなどの不燃材の表面に漆を塗布する技術。独自開発の技術により、木や紙以外への塗布が可能になったことで、これまで無機質であった不燃材に自然のぬくもりとさまざまな表情を与えることに成功。漆の膜の力により、耐久性や防水性、抗菌性にも優れているため、飲食店の塗装にも向いている。漆の用途拡充だけでなく、建築の新たな扉を開く美術建材。

(協力：株式会社 平成建設)

2 漆 × 石灰石

越前漆器（福井県）の職人の手によって一つ一つ手塗りして作られたスマートフォンケース。ケース本体に、石灰石を主原料とする「LIMEX（ライメックス）」という新素材を使用している。

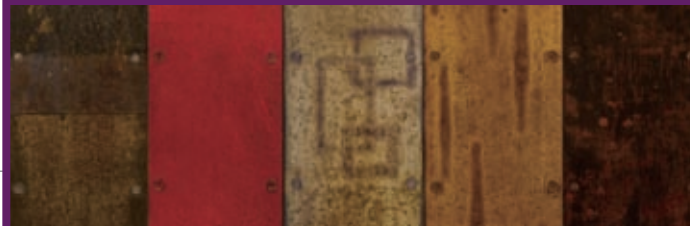
LIMEX は水と木をほぼ使わずに紙の代替をつくり、石油由来原料を減らしながらプラスチックの代替をつくるため、環境負荷が少ない。現在は、食器への応用も進められている。

(協力：慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 伝統工芸みらいプロジェクト)

▲ 漆塗りを全体的に施したコンクリートでつくられたアイランドキッチン。



▲ 施工方法は、直接塗布するほかに不燃材パネルを用いる方法もある。



▲ 塗布された表面は有機的な風合いを持つ。



ケースの表面には、越前漆器のある福井県鯖江市と近郊の越前エリアにゆかりのある食べ物や特産品のめがねなどをイメージした絵柄が施されている。



3 漆 × 3Dプリンター

3Dプリンターで成型した原型にシリコンを塗ってシリコン型を作成し、それに塗った漆を型から剥がすことにより作り出した漆器。漆の艶やかさと本来の美しさが堪能できる、これまでにない新たな漆工芸。漆器は最新技術によって形や厚さなどの制約から解放され、極端に薄く自由な3次元曲面を実現できる。

(協力：角田陽太、写真：Yuu Kawakami / 「SHIZUKU」)

※ 3Dプリンター…デザインデータを元に樹脂などを層状に積層させ立体物を作り出す機械



4 漆 × アウトドア用品

漆器の下部に携帯用の革ひもを取り付け、腰やザックにぶら下げでの運搬が可能ないようにデザインされた漆マグ。超軽量でありながら、堅牢性に優れ、抗菌性や防水性も備えている漆器の特性を活かしつつ、従来の利用シーンを越えて、野外でも気軽に使用できるようになっている。

キャンプの際もかさばらずに持ち運べるように、スタッキング可能なつくりとなっており、そのひとつひとつを会津塗（福島県）の工芸士が手作りしている。

(協力：株式会社 関美工堂 / 「NODATE mug」)

5 漆 × 和紙

和紙に漆の細かな模様が印刷されたスリッパ、ブックカバー、鞆など。独自開発した強度のある和紙に特殊な加工を施すことで、これまで鹿革にのみ可能だった漆印刷技術を和紙にも応用できるようになり、美しく細かな柄が表現できるようになった。漆の柄は日本の古典柄からデザイナーによるモダンな柄まで多種多様である。その一枚一枚を熟練した職人が手刷りによって印刷を施している。

(協力：株式会社 大直 / 「SIWA × URUSHI」)



くらしに漆塗り を取り入れる

現代の生活スタイルにあわせて、
見た目や機能が現代的になった漆器が
たくさん生まれています。
特別な日に使用するイメージの強い漆工芸品を、
普段の生活にもっと取り入れてみませんか？



金沢桐工芸

使い勝手の良いトレイ

クッキーや和菓子、花器や小物などを置く
ようにくぼみをつけたトレイ。素朴な素
材感とどんなインテリアにも合うシンプルな
つくりが、普段使いにちょうど良い。

(岩本清商店 / ちょこっとトレイ 拭漆)

越前漆器

普段使いしたくなる漆碗

粒子の細かい漆を用いたことで実現した、より
丈夫な漆碗。見た目は普通のお碗でも、割れに
くく、傷つきにくい。

(株式会社ジェイコモ / Fudan ふくわん)

川連漆器など

こぼしにくい器

器の内側に反りと返しをつけ、食べ物をすく
いやすくした器。食べ物がスプーンに戻り、
外にこぼれないので、赤ちゃんから大人になっ
ても使える。全国各地の職人の手によってつ
くられた「自分で食べる」を応援する器。

(株式会社和える)

デザインを現代的に

形が変わる箸置き

5つ並べると「輪」になる箸置き。ひとつ
ひとつの形が扇型になり、箸をしっかりと
受け止める。

(輪島キリモト / 箸置き・輪)

香川漆器

色彩が豊かな スプーン、フォーク

木の軽さが普段使いに丁度いい、
色鮮やかな漆スプーンとフォーク。
漆のコーティングで先端も気にならず、
口あたりよく、安心して使える。

(株式会社 tao.)



会津塗

持ちやすい漆碗

底部のカットを指に掛けて持つことで、握力が
弱くても安定してお碗を持てるようにしたユニ
バーサルデザインのお碗。漆器なので、持った
時にも熱くない。

(合同会社 楽膳 / 楽膳碗)



機能を現代的に

召し上がれ、
日本

15

雑煮

地域性豊かな日本の伝統料理

写真：Shutterstock.com、吉澤菜穂 / アフロ

雑煮は餅と人参や大根などの具を煮た汁物。主に正月に食べる伝統的な日本料理です。

大晦日に神仏に供えた供物をお下がりとして正月の日の出後に煮て食べたのがはじまりといわれており、江戸時代（17～19世紀）に一般庶民に広まり、一年の無事を祈願する縁起物の料理に変化し定着していったとされています。

雑煮は沖縄を除く日本各地で食べる風習がありますが、地域により汁、餅の形、具に大きな違いがあります。

東日本の地域では、四角い角餅を用いますが、雑煮発祥の地とされる京都とその影響を受けた西日本の地域は主に縁起物と言われる丸い形の丸餅を用います。それぞれ調理法も異なり、角餅は主に焼いて、丸餅は主に茹でて食べられます。



東京をはじめとしたほとんどの地域では「すまし汁」(左)を使った雑煮が多く、京都などの関西圏では主に白味噌の汁(右)を使う雑煮が多い。

汁は鰹節や昆布などから取っただし汁に醤油と塩で味付けをした透明な「すまし汁」が多く、次に味噌を数種調合した「合わせ味噌」、白く甘みのある「白味噌」の味付けと続きます。餅以外の具はほうれん草や人参、香り付けに柚子、三ツ葉などが加えられますが、これも地域によってバラエティに富んでいます。

これら、地域の色が強く反映された雑煮は主に漆器に盛りつけられ食卓に並びます。色とりどりの食材は同じく地域性豊かな漆器の中で艶やかに浮かび上がり、心地よいぬくもりを手と口から伝えます。

地域によってさまざまな顔を持つ雑煮。この食文化は漆器文化と通じるものがあるようです。



次頁：上 / 四角い餅にすまし仕立ての雑煮
下 / 丸餅に白味噌仕立ての雑煮



弘前市は青森県の西部に位置する街。津軽地方と呼ばれるこの地域の中で、政治・経済・文化の中心地として繁栄してきた本州最北の城下町だ。

「弘前ねぶた」という祭りが行われる地として全国的に有名な弘前市には、毎年8月になるとこの祭りを目当てに国内外から多くの観光客が訪れる。弘前ねぶたは、1980年に重要無形民俗文化財に指定された歴史ある祭りで、表と裏で異なる絵が描かれた扇型の灯籠の山車が、まばゆい光を放ちながら力強い掛け声とともに町中を練り歩く様子は実に圧巻だ。子どもたちによる「子供ねぶた」も行われ、祭りをともに盛り上げる。小さな山車灯籠とともに、金魚の形をした「金魚ねぶた」を手にとって歩く子どもたちの姿はとてかわいらしく、思わず笑みがこぼれる。

この弘前市は、津軽塗の産地としての顔も持つ。塗りと研ぎを何度も繰り返し、独特の模様を表現する津軽塗は、日本の数ある漆器の中でも大変手間がかかることで有名で、期間にすると半年ほどの時間を要することもあるという。代表的な「唐塗」は色漆の断層が美しく、幾重にも塗られた漆によって重厚な雰囲気を持つ。市内にはこの津軽塗を見ることができる弘前市立観光館、体験できる津軽藩ねぶた村などの施設があるので訪れてみるのもよいだろう。



津軽塗の重箱。津軽塗は写真の「唐塗」をはじめとして、独特な文様が特徴。



ななこ塗の茶櫃。津軽塗には、菜種の実を蒔いた上に色漆を塗り込み、研ぎ出した「ななこ塗」と呼ばれる技法などがある。

「錦塗」の盆。ななこ塗の変化の一種で、地に模様を加える。

約四百年の歴史をもつ
津軽地方の城下町

弘前



協力：弘前市役所、津軽藩ねぶた村
写真：弘前観光コンベンション協会、金井元
桜ヶ丘保育園、大塚知則、東田裕二/アフロ
アマナイメーجز





東日本の本州東北部の地域である東北で唯一の現存天守
(城の中心に築かれた物見櫓)である弘前城天守。

北国で雪のイメージの強い弘前市だが、季節を通してとても見どころが多い。特に弘前城は四季折々の美しさをみせてくれる。

江戸時代(17世紀)に築城された弘前城は、現存する天守や櫓などが国の重要文化財に、城跡は国の史跡に指定されており、現在は弘前公園として一般開放されている。ここで開催される弘前さくらまつりは毎年大変な賑わいをみせ、2,600本の桜が咲き誇る様子は桜の名所としても選定されるほどだ。秋は紅葉に彩られ、冬は雪化粧を施されて照明に浮かび上がる弘前城



弘前城のある弘前公園。
秋は紅葉に染まるなど季節ごとに美しく表情を変える。



弘前城からも望める岩木山の麓にはりんご畑が広がる。



上 / 旧弘前市立図書館 1931 年頃までは市立図書館として利用されていた。現在は郷土資料などが展示されている。
右 / 藤田記念庭園洋館 弘前市の実業家 藤田謙一氏の別邸。江戸風な日本庭園が広がる洋館ではアップルパイの食べ比べができる。



また、市内には、弘前城のほか昔の面影を脈々と伝える神社仏閣や古い町並み、明治から大正期(17世紀後半～20世紀前半)にかけて建てられた洋風建築なども数多く残されている。まさに文化財建造物の宝庫である。なかには藤田記念庭園洋館のように、館内で食事を楽しめるところもある。この洋館では庭園の美しい景色を眺めながら弘前自慢のアップルパイを数種類も味わうことができる。

軽くティータイムを過ごした後は、津軽地方の郷土料理を食べておきたいところだ。有名なところでは、「けの汁」「貝焼き味噌」などがある。どれも長い冬を乗り切るために短期間に採れる食べ物を無駄にせずに使おうとする北国の知恵がつまった料理で、やさしい味が体を芯から温めてくれる。「いがめんち」はイカを叩いてミンチにして野菜と一緒に丸めて揚げるなどした料理で、食べ始めると食が進む。

情緒あふれる街並みに食と文化を楽しめる弘前市で、日本の四季の美を再発見してみてはいかがだろうか。



1. 細かく刻んだ人参や大根などの野菜類がたくさん入った味噌や醤油味の汁物「けの汁」
2. ホタテ貝の貝殻に具を入れて味噌で煮込んで卵で閉じた「貝焼き味噌」はけの汁とともに長く愛される郷土料理。
3. 余った材料を揚げてつくられる「いがめんち」は日本のもったいない精神が活きている。



弘前エリア地図

●交通案内

羽田空港から青森空港へ約 75 分。空港からバスで弘前駅前のバスターミナルまで約 55 分。

●問い合わせ

弘前市観光案内所

TEL. 0172-26-3600

弘前市立観光館

TEL. 0172-37-5501

津軽藩ねぶた村

TEL. 0172-39-1511





甲州印伝

写真：藤巻百貨店（銀座店） 協力：印傳の山本

印伝は、鹿革に漆で模様を付けた装飾革製品です。
一説によると、最初の印伝がつくられたのは江戸時代
の寛永年間（1624～1643）のこと。日本人は、インドか
ら幕府に献上された美しい装飾革から発想を得て、日
本独自の装飾革を生み出したのです。

伝統工芸としての印伝は、現在、山梨県の甲府市周辺
で受け継がれているのみです。この地域は昔、甲州と
呼ばれたことから、この地域でつくられた印伝は「甲
州印伝」と名づけられています。漆を装飾に用いると
いう甲州発祥のユニークな加工は当時の人々の目を引
きました。

古くは鎧や兜、巾着、現在では財布やバッグなどもつ
くられるようになった甲州印伝。鹿革でつくられた品は
強度や耐久性に優れ、使うほどに見た目や質感が変化し、
漆の模様とともに味わいが増します。

小桜、波、トンボなど、日本の四季を感じさせる伝統
的な模様が定番ですが、最近ではアニメやゲームの
キャラクターを文様にしたものも登場するなど、時代
とともに種類を増やし続けています。

独特の立体模様によって鹿革の表面に生み出される美
しい陰影に、日本の美を感じてみませんか。

niponica

にぽにか no.25
〈日本語版〉

発行／日本国外務省

〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1

<https://www.mofa.go.jp/>（外務省ホームページ） <https://web-japan.org/>（日本紹介ウェブサイト）